



会員近況

大阪府立産業能率研究所 大橋 正彦

最近十数年米国の諸文献で目につかないことはなかったと言われているパス解析(多変量因果モデル)を、筆者が実際に日頃の研究活動に使い始めてから4年以上を経過した。これは、プログラムの作成からその使い方までご指導を賜った日本電信電話公社近畿通信局の大西正和氏によるところが大である。おかげで昭和57年11月には、このモデルをフルに使って中小小売店の組織化に関する1冊の拙著『連鎖店経営の戦略と革新』誠文堂新光社刊)を出版することができた。今さら言をまたないが、単なる相互関係でなく因果関係の強さが明らかになること、決定係数(R^2)の値が低くても回帰モデルのように全体式またはモデルが無意味とはならないこと、かつ1つのダイアグラムとして明示的に表現できること、などは他の統計手法にはない大きなメリットといえる。

現在、このパス解析は、過去の諸仮説を検証したい場合など、診断指導ならびに研究業務に従事する筆者にとっては不可決の解析手法となっている。研究分野であれ実務の分野であれ、このモデルのいっそうの普及を期待したい。

(株)協栄計算センター
システム開発部開発課 古郡 延子

事務処理システムの開発部門におります。開発物が蓄積されるにつれ作業も新規開発より保守の割合がふえ、近頃問題になっているのは保守作業の効率です。プログラムの作成、修正はオンライン端末による会話型作業となり、バッチ処理によるデバッグ時代からは格段に能率が上がっています。手間がかかるのは保守箇所を探し出すまでの調査設計段階であり、その主な原因は既存システムの情報の不整備にあります。なかでもドキュメント類に関しては、直接運用に響かないために保守対象から取り残されがちです。極端にいえば、確実なものは稼働中のJCL、プログラムなどだけというのが実情です。これでは目次も索引もない部厚い本の中から必要な事項を探そうとするようなものです。そこでせめて索引だけでも作ろうという動きがあります。プログラム中の項目

名称をわかりやすく統一して一覧表(辞書)を作り、既存プログラムを塗り替えておこうというわけです。将来のデータベースへの移行への1歩という含みもあるかもしれませんが、この項目名称の整理の際に、プログラムソースが含んでいる情報のまとめ方の一方法として、レコード記述部分の比較にクラスター分析を使うことを考えています。レコード記述を項目ごとに展開してレコードの先頭からの位置、長さ、属性を求めておき、レコード記述2個ずつについて類似度を算出します。相違点より類似点を強調したいので一致した項目と双方の項目全体との比(を数と長さについて平均した値)を類似度とします。分類することより類似順番を出すことを目的とするため、群平均法を用いて最後まで結合させてみます。問題の性質から少々アレンジし、どちらか一方が他方に完全に含まれる場合は含むほうにまず結合しておいてから群平均法で結合させる方法なども試みましたが、この場合、結合類似度が単調にならないため図示しにくくなり、一貫性を保つようなアレンジはむずかしいものだと思います。もとは自分たちで設計製造したはずの物に対してこのような手法を用いるというのも皮肉な話ですが、数万本という、なかばブラックボックス化しつつあるプログラム本数を考えると、そうも言うてはいられないようです。

日本シーディーシー(株)
コールサービス営業部 今村 達

最近、仕事の上で金融機関でのORの活用例を目にする機会が増えてきたように感ずる。たとえば、外国為替ディーラー間では、移動平均やARIMAによるテクニカル・アナリシス(チャート・アナリシス)を介してディーラーの心理的反応を読み、為替の価格を予測する。また、中期国債ファンドのような自由金利商品の開発にともない、従来以上にポートフォリオ・マネジメントに対する必要性が叫ばれている。証券の各種組合せによりいかに利回りの高い商品を提供するかが、今後の商品の差別化の1つになると予想される。証券のリターンとリスクのトレード・オフから、2次計画法や、目標計画法等の技法が、銀行や証券に限らず一般企業の財務部門でも活用されてくると思われる。さらには、資産・負債管理(アセット・ライアビリティ・マネジメント)といった経営シミュレーションが、コンピュータのソフトウェア利用技術の普及にともない、話題になるであろう。このように、ORは各分野で用途に応じてタイム・ラグを経て徐々に根づいてゆくと思信している。あせらずに気長にORの社会的信頼の獲得する日を待ちたい。